

中欧研究における歴史学と人類学 : Historische Anthropologie誌によせて (各個研究メモ)

著者	森 明子
雑誌名	民博通信
巻	62
ページ	54-67
発行年	1993-11-05
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005847

中欧研究における歴史学と人類学

——Historische Anthropologie 誌によせて——

森 明子

一、はじめに

歴史学と人類学との積極的な対話が唱えられるようになってきたのは一九七〇年代である。それはフランスを中心とする動きであった。そして一九九三年、ドイツ語圏の歴史学者が *Historische Anthropologie Kultur-Gesellschaft-Alltag*, Bohlau Verlag, Köln (『歴史人類学 文化・社会・日常』ベーラウ出版社、ケルン) と題する雑誌を創刊する。ヨーロッパ歴史学界の人類学に対する関心は、社会史の隆盛とともに今後も高まっていきそうな様子である。一方、人類学者もだいたい前からコンテクストを重視するようになっていた。歴史学と人類学の共同作業はどのあたりまで進み、どのあたりで留まっているのだろうか。以下では、ドイツ語圏における歴史学と人類学の、現段階における関係について整理していきたい。まず、新しい雑誌の輪郭から見ていくことにしよう。⁽¹⁾

二、Historische Anthropologie 誌の輪郭

『歴史的实践の多様と矛盾』(創刊案内リーフレット)⁽²⁾ に注目する新しい雑誌の本文はドイツ語で、年三回発行。責任編集者は、デュルメン R. v. Dalmen (ザールランド)、リュドウケ A. Lüdtke (ゲッティンゲン)、メディック H. Medick (ゲッティンゲン)、ミッテラウアー M. Mitterauer (ウィーン) の四名。編集委員会はこれに一〇名を加えた四名で構成される。いずれもドイツ、オーストリア、スイスのドイツ語圏で活躍する研究者で、民俗学者イエックレ J. Jäckle (テュービンゲン) を除けばすべて歴史学者である。

各号は四名の責任編集者のうちの一名と一〇名の編集委員のうち的一名ないし二名が組になって担当し、一六〇頁を目安とする。テーマ編集形式はとらない。中欧および中部東欧を主眼とするが、それ以外のヨーロッパ研究を排除するものではない。各号少なくとも一篇はヨーロッパ以外の研究を掲載する。歴史学、民俗学、人類学にわたる研究を含み、中欧を核としながら全ヨーロッパ、さらにヨーロッパ外をも視野にいれる。この広い領域をカバーするため、編集委員以外に海外や隣接諸分野の研究者が顧問として編集体制を補強する。⁽³⁾ 二六名の顧問の中には C・ギンズブルク (イタリア) や N・Z・デイヴィス (アメリカ) などの著名な社会史家の名前も見られる。この編集体制で試験的に運営し、三年後に再

び編集体制を見直すことを予定している。

一九九二年一〇月の段階で、第三号までの目次ができている。各号は八篇の論文から成る。いくつかのテーマを紹介すると、第一号（ミッテラウアー、ザウラー編）は、バルカンの祖先崇拜、カリブの婚姻、ライフヒストリーの書出し、グッデイ理論再考ほか。第二号（メディック、シャフナー編）は、ミクロヒストリー、自己証明、山村の月経・妊娠・出産ほか。第三号（デュルメン、シンドラー編）は中世初期の贈答、宗教改革期の説教受容、身分社会の服装文化、工業化と写真ほか。人類的、民族学的な問題設定や新しいメディアへの取り組みがうかがえる。

三、「中欧」の意識

新しい雑誌で注目されるのは明確な「中欧 Mittel-europa」意識である。それは中欧の研究者という意味と、研究対象としての中欧という二重の意味をもっている。学的、通文化的な編集体制は比較史の立場からの中欧研究という構想によるものである。ここでいう「中欧」には旧東欧が含まれている。すなわちドイツ、オーストリア、スイスのドイツ語圏を中心とし、その東側のバルカン半島、ハンガリー、チェコ、スロヴァキア、ポーランドなどを含む領域である。中欧研究はこれまでの西ヨーロッパ偏重に対する反省という

現在のな意義をもつのだという。旧東欧の政治的な崩壊が影響を与えていることはいうまでもない。東側の研究者との人的交流が可能になった状況において、ドイツ語圏の研究者が「中」としての意識を覚醒し、フランス、イギリスを中心とする「西欧」に対して、ドイツを中心にした中部・東部ヨーロッパという範疇が浮かび上がってきたのである。

これと比較されるのが、人類学界の動向である。ほとんど時期を同じくして *Social Anthropology* 誌が創刊された。それは一九八九年に設立された EASA (European Association of Social Anthropologists/Association Européenne des Anthropologues sociaux) の学会誌で、一九九二年創刊、英語とフランス語を共通語とする（論文にはスペイン語とドイツ語の抄訳を付す）。簡単に説明しておこう。EASA はアメリカ文化人類学に対して設立されたヨーロッパ社会人類学者の学会である。アメリカの文化人類学が非常に強くなったことに対する反発が、かねてヨーロッパの社会人類学者の間にあった。とくに近年の「文芸としての人類学」というアメリカ人類学界の傾向に反対し、「アンソロポロジーはあくまで社会科学である」という立場を主張して学会が設立された。学会入会資格にヨーロッパの大学で学位をとっていることを条件づけ、アメリカに対するヨーロッパの強い意識をはっきり表わしている。学会は実質上、イギリスとフランスが主

導し、学会活動は英語と仏語の二言語を共通語とする。

このような状況を考え合わせると、*Historische Anthropologie* 誌がドイツ語で貫かれていることも、意味のあることだと思える。ドイツ語よりは英語の方がはるかに広い範囲の読者を獲得できるはずなのにドイツ語を選んだのは、ドイツ語を母国語とする研究者の便宜を考慮した結果だという。とくに民俗学者には英語を不得手とする者が多く、また旧東欧の研究者は英語よりもむしろドイツ語ができる場合も多いという理由があげられた。ドイツ語本文をとることによって活性化される中欧の研究界を重視しているといえよう。

四、社会史と社会人類学——E・P・トムソンを中心に

さて、歴史学と人類学の対話について考えるにあたって、まずトムソンの主張をとりあげておきたい。一九七六年にインドで行われた「民俗学・人類学・社会史」と題した講演の記録「トムソン、一九八七」は、とくに新しいものではないが、歴史学と人類学の違いを明確にし、歴史家としての自己の立場をきわめて明確に打ち出している。彼の主張は、現在の歴史学と人類学との交通を考えるうえで、なお迫力をもっている。

トムソンは、歴史学と民俗学との関係については、歴史学者による民俗資料の積極的な利用の必要を唱えるにとどまっ

ている。一方、人類学との関係はもっと複雑である。

トムソンにとって、「歴史学はコンテクストと過程の学問」であり、その点で歴史学は人類学の共時的な所見と相容れない。「人類学の提供する所見は、特定の社会に留まらず、社会一般についての所見たりうる……つまり、たとえ近現代の諸社会では洗練されたり隠蔽されたりしていても、なお近現代的諸形態の根底にあり続ける、そういう基礎的機能と構造」(トムソン、一九八七・一三六)である。これに対し、歴史学においては「特定の社会的脈絡から分離できる、不変的特徴をそなえた不変の『贈与行為』」なんぞは存在しない……歴史においては、新しい特徴が生じると諸特徴の全体にたいする構造組成のあり様が変化し、同時に社会の構造も変化する」(トムソン、一九八七・一三九)。だから贈与論などの人類学的所見を歴史学へ置き換えるのは間違いだ、という。そこで彼は「社会人類学と社会史との関係は促進せねばなりません。しかし、両者の間にはいかなる『関係』もありえないのです。」(トムソン、一九八七・一四二)。

ただしトムソンは一方で社会史が社会人類学からの導きを必要とする、ということも明言している。人類学の問題設定、規範、価値体系や儀礼の強調、蜂起や騷擾の諸形態の豊かな機能への着目、権威、制御、ヘゲモニーの象徴的表現の強調を社会史に取り入れようというのである。その一方で社会史

のおこなう分析はあくまでもコンテキストから分離されることとがあつてはならないという。しかし、社会史が人類学的な問題設定や視点を取り入れて明らかにされる所見というのは、ある特定の歴史社会のコンテキストの内部で完結されるようなものなのだろうか。

トムスンのロンドンの食料暴動を扱ったモラル・エコノミー論 [Thompson, 1971] やシャリヴァリ論 [トムスン・E・P、一九八二] などの仕事において、彼はこれらの民衆文化を、古い社会体制と新しい社会体制が交錯し、まだ移行しきっていない歴史社会のコンテキストにおける平民文化 (Peopian culture) として位置づけた。彼の明らかにした民衆文化は、歴史的な展開の文脈において、その一場面を構成している。

しかし、その民衆文化はこの歴史社会のコンテキスト内部で完結しているだろうか。このような民衆文化が政治的な権力をもつたのはこの歴史社会のコンテキストにおいてであるが、蜂起を起こさせた民衆文化そのものは現在にも底流しているのではないか。人類学者は文化をこのように捉える。たとえ異なる特徴をもつ文化が優勢になつても古い文化の特徴が根絶やしになることはない、というのが人類学者の文化に対する態度である。たとえば、筆者はヨーロッパ農村においてフィールドワークを行い、古いものから新しいものへの変

化ばかりでなく、農村の古い伝統的な文化が、新しい社会・経済体制のもとで再生産され、古いものと新しいものが同時に重層して存在するのを見た。ある文化を特定の歴史社会的コンテキストに封じ込めてしまふなら、古い文化は過去の社会関係に属するものとして無視されることになる。

トムスンの講演の行われた一九七〇年代当時、人類学は共時的な構造分析が主流だったが、その後、人類学界においても時間の枠組みをとらえようとする問題関心は強まり、コンテキストは非常に重視されるようになった。にもかかわらず、この講演でトムスンが人類学の基本的な特徴として述べたことは、現在の人類学にもやはりあてはまるといえよう。コンテキストを重視し、ダイナミズムを描き出そうとしている人類学者は、ある特定の社会の特定のコンテキストにおけるそのダイナミズムが、限定つきではあるが、ある程度の一般性をもちうることを前提としている。その前提がなければ人類学者のフィールドワークは成り立たないだろう。

ところで、歴史学が人類学に求めるのが、その問題設定や視点のおき方だけで、それをあるコンテキストにおける分析に利用するだけなら、人類学と歴史学の対話はこれ以上進まない。しかし、一九九〇年代においては、その次の段階の対話が模索されているのではないだろうか。中欧研究に即して具体的に考えていくことにしよう。

五、プロト工業化論とモラル・エコノミー——H・メディック

ここでは新しい雑誌の責任編集者であり、日本でもよく知られているハンス・メディックとミヒャエル・ミツテラウアーをとりあげよう。

メディックは一九三九年生まれで、日本ではプロト工業化モデルの論者として知られているが、同時にプロト工業化期の民衆文化の研究に積極的に取り組んでいる。前者の側面ではメンデルスの理論を受け継ぎ、後者の側面ではトムスンの影響が強い。メディックにおいては、民衆文化研究が経済史学の理論と結びついていることに留意すべきである。

プロト工業化論に関してはいくつかの紹介がある。それはひとことでいえば、ヨーロッパの工場制工業に先立つ段階の経済構造のモデルで、家内工業の発展した地域とその周辺の農業に特化した地域との地域間関係に注目し、世界市場との関連も考慮する。このような経済構造がヨーロッパ経済の近代化に基本的な意味をもったと主張する。プロト工業化論の特徴は、国家という枠組みをはずしたこと、地域間関係というより小さな枠組みでとらえながらより大きな世界市場との関連を注目していること、経済史を母胎としながら、人口史や社会史をも結び付けていることである。

プロト工業化論の最初の提唱者はメンデルスで、メディックを含むゲッティンゲン大学のグループの受け継いだプロト

工業化論 [Kriedte, Medick and Schlumbohm, 1981] は、構造論的アプローチに強い関心をもつといわれている [二三四—一九八四]。メディックはとくに家内工業家族の伝統的要素に注目する。それはO・ブルンナーのいう「全き家」[ブルンナー、一九七四]の伝統を引き継いでいて、生計の必要が満たされればそれ以上働こうとしないが、生計を確保できないなら家族労働を際限なく強化して家族の自己搾取をおこなう。これによって家内工業生産を組織している商業資本が差額利潤を確保し、それに支えられて近代資本主義が成立した、というものである [メディック、一九九一]。

ところでメディックが「全き家」の伝統を引き継ぐとした家族経済の自己搾取メカニズムは、トムスンの「モラル・エコノミー」を成立させる基本的な要件でもある。トムスンが「モラル・エコノミー」という用語によって都市の食糧蜂起 [Thompson, 1971] やシャリヴァリを分析した [トムスン、一九八二] のと同じように、メディックもプロト工業化期の民衆文化に関心をもつ。

メディックはドイツの民衆文化として「紡ぎ部屋」をとりあげた [Medick, 1984]。彼のモラル・エコノミー論は、プロト工業化論において「全き家」の伝統的な家族経済を強調するのに対応して、やはり家族経済の充足性と関連づける。近藤によると、この傾向はドイツの研究者に共通するという

〔近藤、一九九〇〕。このようにメデイックの民衆文化研究は、プロト工業化論と補完的な関係におかれる。経済史、人口史と関連させた社会史としての民衆文化であり、地域経済史の中に位置づけられる。

さらに、メデイックは人類学に対しても非常に積極的である。たとえば彼は、M・サリンズの著書をドイツ語に翻訳し出版している〔Salins, 1986〕。また、紡ぎ部屋の研究が掲載されている編著は、D・セイビンとの共同編集で、一九八〇年にパリではじめたラウンド・テーブルを母胎にしているという。そこにはA・コロンやM・セガレーヌなどのフランスの歴史人類学者とともに、A・ストラザンやE・グッデイというイギリスの社会人類学者も論文を寄せているし、研究会には当初からJ・グッデイが参加していたという。さて、この本の「序」に、前近代の民衆文化を注目するようになったそもそものきっかけが記されている〔Medick and Shear, 1984〕。世界システムにおける第三世界のはたした役割と同じような役割を、ヨーロッパの近代化の過程においてヨーロッパの地域も果たした。そしてその文化は近代産業社会の文化とはまったく異質の文化だった。そこから前近代の民衆文化への関心が起こってきたのであり、異文化の研究の訓練を受けている人類学者の知見が注目されるようになったというのである。ここには、研究対象とする歴史社会

の民衆文化を異文化として見る立場が明らかにされている。

六、人類学的な資料へのアプローチ——M・ミッテラウアー

ミッテラウアーは一九三七年生まれ、ドイツ語圏における家族史の研究者として知られている。彼はフィールドの具体的で個別的な事象を重視する歴史家である。たとえば、家族形態や家族の大きさを論じるにあたって、前世紀の世帯リストから個別の世帯の構成員の一年ごとの変化を還元して家族周期を明らかにし、そのうえで論を進めていく。人口史のアプローチにも通じるのであるが、センサスの分析だけにはあきたらず、現地での聞き取りを含むフィールドワークを重視する。人類学者のような長期的なフィールドワークをするわけではないが、今までに民俗学者らとの共同調査も組織している。ミッテラウアーの資料へのアプローチの仕方を示す端的な例が、彼のライフヒストリーへの取り組みである。

「ウィーン大学経済史・社会史研究所 ライフヒストリー・ドキュメンテーション」『Dokumentation lebensgeschichtlicher Aufzeichnungen am Institut für Wirtschafts- und Sozialgeschichte der Universität Wien』の創設は「ミッテラウアーの業績のひとつである。それは歴史学研究所図書館に付属する一室に設置されている。そこにオーストリア全土から寄せられた自伝を整理して利用に供し、さらにその一

部を出版する準備を行い、同時に新たな自伝の受け入れも引き続き行っている。ライフヒストリーは当初は家族史研究の上から注目され、その収集に着手された。ところが、一般への収集の呼びかけや出版に対する反響が予想以上に大きく、ドキュメンテーションを設置するにいたつたのである。ただしライフヒストリーの書き手も読者も、歴史研究を意図しているわけではない、ということがここで重要である。現在、ドキュメンテーションは、書きたい気持ちを持った人が自身のために書くのであつて研究のためでも他人のためでもない、という前提のもとに運営され、成人教育をはじめさまざまな分野から利用されている。このウィーン大学のドキュメンテーションが手本となつて、現在ではヨーロッパのいくつかの大学でライフヒストリーの収集が行われている^⑩。

ここで問題になるのは、歴史家がライフヒストリーをどのように位置づけるのかということである。ライフヒストリーは比較的近い過去に関する情報を個人的、主観的に、しばしば流動的に伝える。人類学者によるライフヒストリーの利用をひきあいにして考えてみると、それはおよそ民族誌記述の三つの段階に分けて位置づけられる。まず、フィールドワークの途上で調査の手法としてあらわれるライフヒストリーがある。この段階では、それは調査者の私的なフィールドノートの中にある。第二に民族誌の構成要素としてのライフヒス

トリーがあり、そこではそれは研究者の意図にしたがつて民族誌の文脈の中に配置される。第三にひとつの作品として完結した形で著される場合もある。この場合、書き手が調査者である場合もあるし、あるいは調査者が助手として携わり、自伝作者に助言を与えることもある。ライフヒストリーの作品自体をひとつのエスノグラフィであるとする考え方もあるだろうが、完成度の高い作品になればエスノグラフィと同一視できない場合も多く生じる。ところでウィーン大学におけるライフヒストリーの位置づけは、このいずれにもあたらない。そこに現地調査という手続きが介在しないからである^⑪。

歴史家はライフヒストリーに何を求めているのだろうか。筆者の質問に対し、ミッテラウアーは「überbrücken」（橋渡し）であると答えた。教区簿冊資料や住民リストなどの前世紀の文書資料を解釈するうえで、人々の生の声ははかりしれない力をもつというのである。たとえば、出生記録の分析から庶子の出生率が非常に高いという事実が導き出されるが、それがどのような状況から起こつてきたのかは、ライフヒストリーによつてはじめて解き明かされた。ウィーン大学家族史研究グループの村落調査で求められているものもやはり橋渡しであるという。「日常生活の歴史 Alltagsgeschichte」
「下からの歴史 Geschichte von unten」を問題意識として、

歴史社会においては資料がきわめて限られている。そこで今世紀前半を生きた人々の生活経験が歴史研究に大いに貢献するといふのである。歴史学者は、歴史の体験をアナロジーによつて説明する補助的な役割をライフヒストリーに与え、それを歴史研究に取り込んでいふのだ。

七、小括

本稿でめざしたのは、人類学と歴史学の対話の現状と将来の可能性を、中欧研究という枠組みにおいて探ってみることだった。新しい歴史学が華々しく起こつたフランスに比べて、ドイツは後進の、西欧とは異なる特徴をもつフィールドである。このような状況において、メディックとミッテラウアーという二人の歴史学者が、ともに人類学に関心を寄せながら、それぞれ異なる方向から接近していることに、まず留意しておきたい。

メディックの研究は、プロト工業化論と、同時期の民衆文化というふたつの側面にわたつていふ。メディックの民衆文化の研究は、彼のプロト工業化モデルの中におさまるべき位置づけが与えられた社会史であるといえるだろう。大きな意味での経済史のアプローチから発して、近代以前の社会の民衆文化を異文化としてとらえ、その民衆文化をプロト工業化期のダイナミズムという枠組みでまとめあげていくのである。

メディックに比べると、ミッテラウアーは個別的な記述を重視する家族史家で、ライフヒストリーの収集、出版は彼の特徴をよく示している。ミッテラウアーにおける人類学の摂取は、むしろ資料へのアプローチの仕方の特徴がある。彼は、たとえ文書資料を分析する場合であっても、教区簿冊や世帯リストから等身大の人間の姿をすくいだそうとする。人口史研究のケンブリッジ・グループと積極的に交流しながら、人口データを計算機で処理するだけで結論を出すやり方にあきたりない。ミッテラウアーが歴史家でありながらフィールドを重視するのも、フィールドにおいて遭遇する個人的な人間関係の縮尺をもつて資料を扱おうとする姿勢に理由があるだろう。このようなミッテラウアーのやり方に対して、否定的な見解もある。彼の人類学理論の受容について多少問題があること——たとえば専門的な用語を十分に消化しないまま性急に使う傾向——も、気になる点である（たとえば[Mitterauer, 1990]）。しかし、いづれにしても新しい分野に切り込んでいく彼の積極性は高く評価される。

さて、ミッテラウアーの理論的枠組みにおいてもメディックについて見たのと同様に、ブルンナーの「全き家」モデルは重要である。彼の家族史研究は「家父長制からパートナー関係へ」という大きなテーマのもとに組み立てられている[Mitterauer and Sieder, 1982]。それはもう一人のドイツの

代表的な家族史家ヴェーバー・ケラーマンにも共通している [Weber-Kellerman, 1974]。このテーマはむしろドイツ家族史に特徴的な理論的枠組みであるといえよう。そして、我々はプルナー以来、中欧の社会史家のもっていた「全き家」モデルが、社会人類学の家族・親族理論と適合するもので、それを受容する受け皿を用意していたことに注意するべきである。

ここで、問題を人類学と歴史学の関係にもどし、筆者なりの考えを述べてまとめにかえたい。人類学者と歴史学者では、その基本的な立場が異なることはトムスンが両者を区別したとおりだと思う。人類学者がどんなにダイナミズムを論じても、人類学者のもつ時間のベクトルは歴史学者のもつ時間のベクトルのようにクロノロジカルにはできていない。この点に関しては将来も変わらないだろう。

中欧の歴史学者が人類学からまず摂取したのはグッディの理論だった。グッディはヨーロッパの広い範囲にわたる親族、結婚、相続関係を、社会人類学の理論から説明した ([Goody, Thirsk, and Thompson, 1976] [Goody, 1983] など)。ただし、彼のヨーロッパに関する著作は特定社会の民族誌的視点を含んでない。そこには、綿密なフィールドワークに基づく民族誌の重視という人類学の重要な特徴は抜け落ちることになった。このような理論を受容した後、歴史学と

人類学の対話は次の段階に進むことになる。

そこで現在問題になっていることは、歴史的社会をいくつかに時代区分してある文化があるコンテクストに規定されるという考えから、設定されるコンテクストの範囲を相対化する動きだといえるのではない¹²。

メデイックのプロト工業化モデルという枠組みは、この問題に対するひとつの方策を関係史に求めている例といえよう。これに関連して川北も、社会史にはスタティックになりがちな危険があるので、それを関係史のアプローチから打開しようとする展望を唱えている [川北・横山・川島、一九九〇]¹³。現在のメデイックには、さらに解釈人類学的な傾向に対する関心もうかがえる¹⁴。

オーラルな資料に関心を寄せ、フィールドにも踏み出したミッテラウアーの方向が、どのような形にまとめられていくのかについて、現時点で見通すことはできない。しかし、親族名称や祖先崇拜など多くの点で西欧世界とは異なる文化伝統をもつバルカンやスラヴのような対象に積極的に取り組もうとしているのが彼である。資料へのアプローチの仕方から人類学に接近したミッテラウアーの場合、その歴史人類学はより混沌としているようだ。

メデイックもミッテラウアーも含め、中欧の歴史人類学はさまざまな試みを同時に包み込んで新しい可能性を探ろうと

する段階にあるといえよう。

注

- (1) 筆者は一九九二年五月から一九九三年三月にかけて文部省在外研究員としてオーストリアに滞在した。滞境中は主としてウィーン大学経済史・社会史研究所(Institut für Wirtschafts- u. Sozialgeschichte)のミッテラウアー教授(Michael Mitterauer)‘民族学研究所(Institut für Völkerkunde)のドツェント(教授資格既得者)であるギングリッヒ氏(Andre Gingrich)をはじめとし、同研究所および民俗学研究所(Institut für Volkskunde)の研究スタッフと情報交換した。本稿の内容の一部はそこでの見聞に負うている。ただし、記述は筆者の問題関心にもとづいている。したがって専門外の社会史に関する知識不足やそのための誤解があればその責は筆者にあることをお断りしておく。
- (2) Prospekt f. "Historische Anthropologie" Bohlan, Köln 1992 Okt. (創刊案内リーフレット)による。
- (3) 第一号は一九九三年五月刊行予定だったが、七月上旬にずれ込む見込みであるという連絡を本稿執筆中(六月上旬)に得た。
- (4) 日本人の研究にも関心が寄せられている。その窓口とな

る顧問には、筆者があたつてゐる。

- (5) ウィーン大学民族学研究所のドツェントで、EASA学界誌編集委員のギングリッヒ氏との談話による。
- (6) これについて議論するためには、文化の研究として何を取り上げるかということも考慮する必要があるだろう。トムスンは食糧蜂起にしろシヤリヴァリにしろ、民衆文化(平民文化)として華やかな反抗や対決の様相をとりあげている。このような騒擾や蜂起をとりあげることによって、トムスンは民衆文化の歴史社会的コンテクストを強調した。これに対して、メディックは民衆文化の分析として対決の側面だけでは一面的であるとして、飲酒や紡ぎ部屋を取り上げて文化を享受する側の調和的側面も分析している[Medick 1982]。トムスンからメディックへ、歴史学者の文化の捉え方に展開があるのがわかる。たとえば「安場・斉藤、一九八三」、「斉藤、一九八五」、「二宮、一九八四」、「篠塚、一九九二」、「若尾、一九九三」など。
- (7) ミッテラウアーの研究の紹介については「若尾、一九八九」、「森、一九九〇」など。
- (8) たとえば [Mitterauer and Sieder, 1979]。
- (9) ドイツではテュービンゲン、ハーゲン、ブレーメン、ナートウム、ザールブリュッケンで、またイタリア、フ
- (10)

ランス、イングランド、ノルウェーでも収集されている。数年前から、チェコでもウィーンの研究者と共同のプロジエクトがスタートした。ライフヒストリー収集については [Mitterauer, 1991] を参照。

(11) ミッテラウアーは監修者として、ライフヒストリー・シリーズを刊行している。Damit es nicht verloren geht...

(『失われなかったために』と題する叢書で、前述のドキュメンテーションの自伝資料の中から出版の可能性のあるものが選ばれる。非常に人気のあるシリーズで、一九八三年に第一冊が出て、一九九三年一月には第二七冊が出版された。この出版活動の場合、若い研究者もしくは学生が出版助手として著者を助けるが、それは主として文章表現の問題を解決するためである。出版助手の側に、ライフヒストリーの語られている社会を研究対象とする意図はほとんど見られない。』

(12) エトノスという視点 [「二宮、一九九〇」]、また、現在進行中の国立民族学博物館の共同研究「ヨーロッパ基層文化の研究」にも同様の問題意識をうかがえる。

(13) 川北はラスレットを中心とするケンブリッジ・グループの仕事为例にあげて、社会史には閉鎖社会のモデルをつくる傾向があると指摘している。

(14) たとえば *Historische Anthropologie* 誌第二号 (メディック

編集) の第二号の巻頭はギンズブルクのミクロヒストリーを掲載し、第三号では自ら「見せる文化としての服装」について執筆予定である。

引用文献

ブルンナー、オットー

一九七四『全き家』と旧ヨーロッパの『家政学』(初出一九五六) ブルンナー著、石井紫郎ほか訳『ヨーロッパ——その歴史と精神』一五一—一八九頁 岩波書店

GOODY, J.

1983 *The development of the family and marriage in Europe*. Cambridge U. P., Cambridge.

GOODY, J., J. THIRSK and E. P. TOMPSON (eds.)

1976 *Family and inheritance rural society in western Europe 1200-1800*. Past and Present Society, Bristol.

川北 稔、横山俊夫、川島昭夫

一九九〇『鼎談』『社会史の行方』『ユスティティア』①
一三—二七頁 ミネルヴァ書房

近藤和彦

一九九〇『モラル・エコノミーとシャリヴァリ』『民衆

文化』シリーズ世界史への問いの 一七—四四頁
岩波書店

KRIEDTE, P., H. MEDICK, and J. SCHLUMBOHM

1981 *Industrialization before Industrialization Rural Industry in the Genesis of Capitalism*, Maison des Sciences de l'Homme and Cambridge U. P., Cambridge. (Industrialisierung vor der Industrialisierung. Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen 1977).

MEDICK, H.

1982 "Plebeian culture in the transition to capitalism", in *Culture, ideology, and politics: essays for Eric Hobsbawm*, Samuel, R. and G. S. Jones (eds.), Routledge and Kegan Paul, London: 84—113.

1984 "Village spinning bees: sexual culture and free time among rural youth in early modern Germany", in *Interest and emotion Essays on the study of family and kinship*, Medick, H. and D. W. Sabean (eds.), Maison des Sciences de l'Homme and Cambridge U. P., Cambridge.: 317—339.

メディック、ハンス

一九九一「伝統的社會から産業資本主義への移行における

る世帯と家族の構造的機能——プロト工業的家族」(馬場 哲訳)(初出一九七六) F・メンデルス/R・ブラウン他著 篠塚信義ほか編『西欧近代と農村工業』二九—六三頁 北海道大学図書刊行会

MEDICK, H. and D. W. SABEAN

1984 "Introduction" in *Interest and emotion Essays on the study of family and kinship*, Medick H. and D. W. Sabean (eds.), Maison des Sciences de l'Homme and Cambridge U. P., Cambridge.: 1—8

MITTEBAUER, M.

1990 *Historisch-Anthropologische Familienforschung Fragestellungen und Zugangsweisen*, Böhlau Verlag, Wien.

1991 "Lebensgeschichte sammeln. Probleme um Aufbau und Auswertung einer Dokumentation zur populären Autobiographie", in *Biographieforschung*, H. Heidrich (Hg.), Fränkisches Freilandmuseum, Neustadt a. d. Aisch.: 17—35

MITTEBAUER, M. and R. SIEDER

1979 "The Developmental Process of Domestic Groups: Problems of Reconstruction and Possibilities of Interpretation", in *Journal of Family History*, 4/3:

1982 *The European Family. Patriarchy to Partnership from*

the Middle Ages to the Present, Basil Blackwell, Oxford. (first published in German as Vom Patriarchat zur Partnerschaft: Zum Strukturwandel der Familie, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München, 1977)

齊藤 修

一九八五『プロト工業化の時代』 日本評論社

篠塚信義

一九九一「解題」F・メンデルス/R・ブラウン他著

篠塚信義ほか編『西欧近代と農村工業』 三五五

— 三八八頁 北海道大学図書刊行会

森 明子

一九九〇「ヨーロッパ家族史研究における『家族』概念

をめぐって——ミッテラウアーを中心として

——』『歴史人類』一八一七五—一九八頁

高木正道

一九八九『ヨーロッパ初期近代の諸相——経済史と心性

史のあいだ——』 梓出版社

二宮宏之

一九八四「西欧のプロト工業化」『社会経済史学の課題

と展望』 二四—三三頁 有斐閣

THOMPSON, E. P.

1971 "The moral economy of the English crowd in the

eighteenth century" in *Past and Present*

50: 76-136

二宮宏之編

一九九〇『深層のヨーロッパ』 民族の世界史⑨ 山川出版

版社

SAHLINS, M.

1986 *Der Tod des Kapitän Cook: Geschichte als Metapher*

und Mythos als Wirklichkeit in der Frühgeschichte

des Königreichs Hawaii, Klaus Wagenbach, Berlin.

(Historical Metaphors and Mythical Realities: Tompkins, Edward P.

一九八二「ラフ・ミュージック」『イギリスのシャリ

ヴァリ』(福井憲彦訳)(初出一九七二)二宮宏之

ほか編『魔女とシャリヴァリ』 七九—一三八頁

1974 "Patrician Society, Plebeian Culture" in *Journal of Social History* 7: 382-405

新評論

- 一九八七「民俗学・人類学・社会史」(近藤和彦訳)『思想』七五七 一二六一—五二頁(一九七六年十二月、カリカットにおけるインド歴史学会での講演の改訂)

若尾祐司

- 一九八九「近代ヨーロッパの家族と親族——ドイツを中心に——」『社会的結合』シリーズ世界史への問い 4 一七一—四五頁 岩波書店
- 一九九三「プロト工業家族の歴史的位相」『歴史評論』五一五 九二—一〇六頁

WEBER-KELLERMANN, I.

1974 *Die deutsche Familie Versuch einer Sozialgeschichte*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.

安場保吉、斉藤 修編

- 一九八三『プロト工業化期の経済と社会』数量経済史論集3 日本経済新聞社

(第三研究部)

